

宮城県漁業士会報 第7号

海 かいと 人

発行：平成16年3月
宮城県漁業士会
仙台市青葉区本町3丁目8-1
(宮城県産業経済部産業人材育成課内)
TEL 022-211-2764
FAX 022-211-2769

牡蠣の水揚げ（石巻市）

あいさつ

宮城県漁業士会会長 鈴木 章登



早春の候、皆様にはご健勝のこととお喜び申し上げます。常日頃、皆様方には漁業士会活動に御協力いただき誠にありがとうございます。

さて、宮城県漁業士会では皆様ご存じのとおり海外または国内派遣研修事業、東北・北海道ブロック漁業士研修会、一次産業交流会、また青森・岩手・宮城県の女性漁業士交流研修会などの研修事業等を盛んに行っております。私たちは、これらの研修等を生かして質の高い漁業士を目指すとともに少年水産教室や水産青年フォーラムなどの各種会合等への助言や講師の派遣も行っており、要望があれば会員を派遣したいと考えていますので、御活用いただきたいと思います。

来年度には漁協合併や市町村合併を控え、ますます改革の速度が速くなると思われ、漁業士としての各浜での指導的役割が大きくなると考えられます。漁協合併の講習会などで勉強したことなどを私達自身が情報を発信し、浜の活性化に寄与して参りたいと思います。

また、今後、男女共同参画社会が推進されるにつれ、漁村においては女性の役割がますます重要になりますので、漁業士会としても女性漁業士の育成や活動を活発に行なっていきます。

最後になりますが会報発行にあたり、関係機関、会員の皆様のご協力に一言お礼を申し上げます。

漁協合併研修会について

宮城県漁業士会事務局

平成十五年六月五日に志津川町「ホテル観洋」で宮城県漁業士会が主催した。今回は「広域合併」をテーマにして、宮城県漁協合併推進本部の方々をアドバイザーにお迎えし、パネルディスカッション形式で活発な意見交換が行われました。ここで主な意見を紹介します。

○市町内漁協合併の問題点について

・合併にメリットなしと思っている組合員が多い。しかし、合併なくして組合が存続できたかという点を忘れてしまっている。

・合併による組合財務の改善については、支所の廃止、職員の削減といった単純な方法だけでは組合員へのサービスの低下が懸念される。

・合併しても、未だに後継者対策や生産物の品質確保等に係る一丸となった取組が見えてこない。

○広域合併に向けて

・農協の合併等を参考にして、漁業者一人一人が合併後の組合作り積極的に参画していくことが必要である。

・浜を活性化するためには、広域合併は大チャンスである。今までの市町内合併の課題を整理して、同じ過ちを繰り返さないことが大事である。

・組合が大きくなるメリットを最大限に生かし、新規事業を立案していく等、広域合併に前向きな姿勢

をとるべきである。

・合併組合の運営等には、女性や後継者の意向を反映させることが必要である。

宮城県漁業士全員で、後継者に誇れるような組合を目指し、広域合併に協力していきましょう。



広域合併に係る研修会

平成十五年度 一次産業交流会について

宮城県漁業士会事務局

農林漁業の担い手が一堂に会し、交流を深めることを目的とした一次産業交流会が平成十五年七月十七日から十八日まで塩釜市浦戸漁業協同組合を会場にして開催されました。

今回は、取り組み事例の発表と桂島の海岸保全林やカキ養殖漁場、アサリ漁場等を視察しました。取組事

例の概要は次のとおりです。

①浦戸諸島について

青年漁業士 内海 信吉さん

桂島でアサリの潮干狩り祭りが始まって十五年になる。この祭りには、島外から毎年千人を超える人々が参加しており、リピーターの方も多いため訪れてくれる人達に島の良さをアピールしたいが、島には何も無い。しかし、この何もないことの良さを知って欲しいと思っている。良さを知っている自分から積極的にPRすること、これが大事だと思う。

②魅力ある漁村づくりについて

塩釜市浦戸漁協女性部 部長 鈴木ひろゑさん

女性部活動として、「島民の介護は、島民の手で」という考えを実現するため、四十人がヘルパー二級を十三人が三級を取得し、一人住まいの青年寄りの方に食事を届けたりしている。

今年度からは新たに島に合宿にくる子供達を対象に島の民話や小物作りを教える等、出前講座に取り組み予定である。

③ファームステイの受け入れ

指導農業者 芳賀よみ子さん

平成十年から登米生活改善クラブの会員が中心となって首都圏の中学生のファームステイを受け入れている。

受け入れ側の農家の育成はもちろんのこと、お金、人、時間がかかる活動なので、必要経費はもうらうべき

である。首都圏の子供達を対象にしているが、地域や県内の子供達に農業を教えたい。体験を通じて県内の農作物が安全・安心であることを知ってもらいたい。

海岸保全林等の視察では宮城県仙台産業振興事務所林業振興部職員の方、漁場視察では指導漁業士の内海公男さん、青年漁業士の長南正義さんと内海信吉さんにお世話になりました。また、会場の提供等全面的に御協力いただきました塩釜市浦戸漁業協同組合の高橋組合長さん及び職員の方々がありがとうございました。

平成十六年度は、農業がメインとなって開催される予定です。漁業士会会員の皆さんには、積極的に参加されますとともに、御協力お願いいたします。



海岸保全林を視察する参加者

平成十五年度 東北・北海道ブロック 漁業士研修会について

宮城県漁業士会事務局

平成十五年九月十二日に福島県飯坂町で東北・北海道ブロック漁業士研修会が開催され、来賓の水産庁の方をはじめ、総勢五十六名が参加しました。

講演は、水産庁研究指導課普及指導官の高瀬さんと、水産庁代表取締役の乾さんからいただきました。

今回は「水産物の輸入政策と価格政策」と題して行われた乾さんの講演の概要をお知らせします。

(講演概要)

水産物の輸入量は、三百五十万トンを超え、金額にして約一兆七千億円に及んでおり、日本の漁業生産量に匹敵するほどまでになった。日本の輸入金額は、世界の水産貿易金額の約三割を占めている。この過剰な輸入攻勢と景気低迷により、高級魚の価格の下落が著しい。ここ数年で、伊勢エビはキロあたり八千円から三千円へ、ズワイガニは二万円から六千円に下がった。一方で、代表的な大衆魚であるイワシは、資源の低迷から価格が上昇した。

輸入水産物の種類とその輸入理由は、サケ、マグロが高級品志向に基づいて、サバ、タラは加工原料の確保のため、ワカメ、カキ、ウニ等は外国産の価格が安いいため、イワシ、アサリ、シジミ等は国内生産量の減

少のために輸入されている。

沿岸域の開発等による資源の減少、高級品志向の強まりに加え、実は国内の流通が大きく変わったことが輸入に拍車をかけた。昔は、魚を扱うのは、小売店が八割、量販店が二割であった。しかし、今ではこの割合が逆転している。この量販店の発達で、輸入水産物の増大と深く関係している。輸入水産物は、量販店が求める「定量」「定質」「定価」「定時」を満たすのに好適であったと言える。

WT0の会議が現在(九月上旬)メキシコのカンクンで行われている。今年五月の交渉でWT0議長から、水産物は「関税撤廃の対象とする分野」とする案が示されたため、全漁連を中心に業界は猛反発している。水産物の関税が撤廃となると日本の生産者への打撃は深刻である。

こうした情勢の中で、生産者のするべきことは、消費者である国民を味方につけることである。国産の安全性、鮮度は、輸入品の持つていない武器である。この武器を利用して消費者と交流・連携を深めることが大切である。「売れなければ、輸入しなくなる」とこのような市場原理を念頭においた活動が必要である。

また、消費者である国民に漁業・漁村の多面的機能をPRすることも重要である。カキ等の二枚貝は、富栄養化した海域の水質浄化を担っている。底引き網漁業は、年間で国土の二分の一にあたる面積を掃底しており、河川等から流入したゴミ、不法投棄されたゴミ等を回収している。日本の海岸線は、三万四千キロに

及ぶ。沿岸には浜という単位の集落が六千あり、そこには、二十三万六千人の漁業者が住んでいる。港は四千港ある。これは、海岸線六キロ毎に一つの集落があること、海岸線百五十メートル毎に一人の漁業者がいること、同じく九キロ毎に港があることを示しており、国民の生命・財産の保全に大きく貢献しているのである。

食育の徹底も必要である。現在、スローフードが見直され、地産地消が各地で推進されている。当然、その中で漁業者の役割、分担も出てくるので、消費者・国民を味方につけるため、漁業士の皆さんは積極的に関わってほしい。



東北・北海道ブロック漁業士研修会

女性漁業士 交流研修会について

宮城県漁業士会事務局

平成十五年度の女性漁業士交流研修会が八月二十一日から二十二日まで、岩手県水沢市で開催されました。今回からは青森県の女性漁業士の方も参加し、青森、岩手、宮城の三県合同の研修会となりました。

研修会は、パネルディスカッション形式で、漁村女性の活動に係る課題と今後の取組みについて活発な意見交換が行なわれました。ここで主な意見を紹介します。

○課題

- ・一漁家一組合員制のため、通常、女性が正組合員になることがないため、地域や漁業活動において、女性があまり重要視されていない。
- ・夫が妻の社会進出を望んでいないとともに、女性の活動に対して理解が乏しい。
- ・農業関係の女性活動は活発なもの、女性漁業士独自の活動がない。

○今後の取組み

- ・女性の活動の推進という点では、農協系統の良い所を積極的に取り入れるべきである。
- ・女性漁業士の活動については、他人に頼らず、女性漁業士同士で協議して、広い視野をもって活動を行なうべきである。

平成十六年度もこの交流研修会は開催されますので、女性漁業士の皆さんは、是非ご参加ください。

支部だより

▼北部支部

漁協合併について

指導漁業士 小野寺清次
(気仙沼地区漁業協同組合)

私の所属していた大島漁協は、平成十五年四月一日に、鹿折・階上・松岩漁協と合併し、気仙沼地区漁協となりました。

この四漁協による合併は、平成十三年夏の合併協議会を発端として始まり、数度の検討委員会、協議会、地区懇談会を経て、平成十四年十一月中旬の四組合臨時総会にて承認されました。

合併後、一年近く経過しましたが、合併前と大きく変化したとは感じられず、合併によるメリットが活かせていないように思えます。合併を経験した他の組合の漁業者の中には、サービスが低下したと話す人もいます。また、組合などによる説明が不足しているのではないかと、という声もあります。一番問題なのは、自分たちの生活に最も関係のある漁業権が従来のままであり、合併とはただ単に組合の経営だけの問題と誤っていただと思ひます。このため一般組合員は、合併にあまり関心がなく、組合員が現場の声を伝える機会がなかったことも事実です。現在宮城県では、広域での漁協合併計画が進んでいます。私達漁業士

は現場の人間として青年部・女性部などとともに、率先して合併問題に取り組み、合併のメリットを活かすことが、自分たちの地域にとって重要であることを組合員の皆様に知ってもらえるよう尽力することが必要だと思ひます。



研修会で発言する小野寺指導漁業士

少年水産教室について

青年漁業士 及川 淳宏
(大谷本吉漁業協同組合)

少年水産教室の講師の依頼を受けた時、何を話せば良いのかが分からず戸惑いました。自分がやっているホタテやワカメ養殖について説明すれば良いのか、漁業全般について説明するのか等々、中学生相手にどんなことを話したら興味を持って聞い

てもらえるのか色々考えてみたものの結論がでず、事務局である気仙沼地方振興センター水産部に相談してみました。するとこの企画の目的は、漁業者の生の姿を生徒達に少しでも理解してもらうことなので、話しの内容は特に決まっておらず、普段の漁業作業のことや自分がどの様にしている漁業者になったのか、普段の生活等自分の思うことなどを気軽に話し時には生徒に質問をしても構わないからと言われ、少し気が楽になりました。

当日は、私の不安以上に天気が悪く、前日から降り続く大雨で、欠席された生徒さんもいました。

前日から室内での講義が続いていたので、少し座学に飽きているのかと思っていたのですが、話し始めると生徒さん達は意外と興味深そうに話を聞いてくれたのでちよつとだけホッと思いました。話し始めれば時間はあつたという間に過ぎ、なんとか講義を終えることが出来ました。自分としては、精一杯分かりやすく話したつもりですが生徒さん達にどの様に受け取られたのか心配だったもので、後でアンケートの結果を教えてもらいました。すると「大変な仕事だと思つた」「自分もやつてみたい」など良い意見が多く安心しました。

しかし、中には家族が漁業を営んでいる生徒さんがおり「知っている内容だった」と言う意見もあり、気は抜けなないと思ひました。出来れば海へ出て実際に体験が出来れば一番良いのでしょうか。

北部支部としては、少年水産教室

への参加は今回が初めてだったので、アンケートの意見等を見てみると良い反応があり、後継者の育成にある程度寄与できたのではないかと思います。来年度以降も少年水産教室への参加の必要性を強く感じました。



講師を務める及川青年漁業士

▼中部支部

視察研修「ホタテガイ採苗(ヒトデ駆除)及び養殖管理」に参加して

青年漁業士 高橋 陽一
(雄勝町東部漁業協同組合)

近年、中部地区の地種を使用したホタテ養殖では、採苗袋の中に入るヒトデの被害が問題となっています。県では普及事業の中でこの問題を研修のテーマとして取り上げ、ホタテ

の大産地である青森県での取り組みを学ぶための視察研修を六月十二日から十三日にかけて実施しました。この研修には、地種を採っている三つの漁協の青年部の方々と漁業士会中部支部からは私を含め二名が参加しました。

初日は、青森県水産増殖センターにおいてホタテ採苗時のヒトデ駆除方法について話を伺い、ホタテガイ採苗への影響はヒトデの浮遊期における幼生数で判断できること、採苗袋の結び目に付く習性を持つので、採苗袋を洗浄、交換することで駆除できるとの説明を受け、今後駆除を行っていく上で大変参考になりました。

二日目は青森県中央卸売市場を視察し、青森県のホタテ流通実態について青森中央水産で話を伺いました。この中で、消費動向の変化により、陸奥湾のものは売りやすい小型サイズの需要に対応していること、宮城県産のホタテは八月十二月に入荷し、大型サイズなので贈答用が中心のことでした。

卸売市場の視察の後、陸奥湾に面した平内町漁協の養殖現場を視察し、青森県漁業士会会長、平内町漁協青年部長他の方々と情報交換を行いました。

平内町漁協の平成十三年度のホタテガイ生産量は青森県全体の四十六%を占め、全国で最も生産量の多い漁協となっているそうです。静穏な陸奥湾は養殖施設や方法が雄勝とは違っていることが印象に残りました。今回の研修に参加して、ヒトデ駆

除方法を学んだだけでなく、他県のホタテ養殖と自分達との違いを学ぶよい機会となりました。今後、研修で得た知識と情報を生かしがんばっていきたいと思います。最後に今回の研修でお世話になった各関係者の皆様に感謝申し上げます。



視察研修参加者

昨年を顧みて

青年漁業士 三浦 一郎
(矢本町漁業協同組合)

昨年は視察・研修が漁協、のり部会等で盛んに催され、有意義な一年であったと思う。

税務講習会が県の主催で開催され、私は四日間のスケジュール全日程を受講した。青色申告と法人化への取り組みや帳簿、貸借対照表、損益計算

書の作成等、講師先生に分かりやすく教えて頂き、受講者全員が理解を深めたようであった。
一方で「漁業者が畑違いのデスクワークを四苦八苦しなからするよりもその労力と時間を網の修理や機械の整備をしたほうが良くはないか」という意見もあり、以前から青色申告に時間を費やしている私にもその考えが無いとは言えなかった。しかし、最近になってようやく自分の経営がどの程度適切に行われているのか、あるいはどの部分が弱点なのか把握できるようになり、効果が現れてきたのをヒシヒシと感じている。



税務講習会の受講状況

今年は漁業を経営する上での攻撃と防御等を課題とし、これまで十分過ぎるほど感じた経営の厳しさだけ

でなく、おもしろさ等を少しでも感じる事ができればと思っている。
なにはともあれ、本業が大事と考え、年明けには、藩祖政宗公が航海安全を祈願して建立したと伝わる地元の波切不動尊に大漁豊作と健康を祈願してきたところである。本年は困った時のなんとかをせずに済めばよいのだが。

▼南部支部

新しいノリ陸上採苗施設が今漁期から稼働

青年漁業士 鈴木 亨
(七ヶ浜町漁業協同組合)

陸上採苗は、海況・気候の変化に左右されることがなく、計画的に安定して健全なノリ種網を確保できます。七ヶ浜町漁協では従来から直径二mの水車を用いて、当該漁協の全ノリ種網必要数(十萬枚強)の約二割を生産していました。今回整備した施設は、八月三十日から稼働し、十日間で約一万枚のノリ種網が生産され、約三割が陸上採苗により確保されました。

施設は七ヶ浜町漁協が、平成十四年度海面養殖業高度化推進対策事業により、国、県から事業採択を受けて整備しました。総事業費は約五千四百万円です。

整備した主な機器は、

①水車施設…直径六m×三連水車を二基。

②温調設備…二十tタンク二基、冷水機、ボイラー、取水ポンプ。

- ③ 冷凍施設・プレハブ冷凍庫（マイナス三十五度）七十立方
- ④ 糸状体管理設備・四トン水槽二基、冷水機、蛍光灯微鏡等です。
- ⑤ 水車は、直径が六mもあり、長さ十八mのノリ網を一巻きしても一mほど余裕があります。



直径6mの水車

採苗方法は、三連式の水車二基で一連に約四十枚のノリ網を巻き付け、水車を回転させて糸状体から放出された殻胞子の入った水槽に潜らせ、ノリ網に殻胞子（ノリ芽）の付着が確認されたら新たなノリ網を巻足しして、これを四〜五回繰り返します。採苗開始から約一時間で一連に巻足しされた網は百五十〜百八十枚になります。その後、水槽から糸状体を除き、ゆっくり水車を回して四時間間の養生（芽立ち）を行い午前一杯で作業は終了します。

従来の水車に比べて、巻き取り式から巻足し式にし、養生水槽を使わ

ないことから芽減りが少なく、作業も軽減されました。

陸上採苗の割合は今後も増えて行くと思われませんが、年ごとの気候・海況変化、ノリ自体の本来の生活史を考えれば、野外採苗との両輪での取組が必要だと思います。

七ヶ浜町漁協は、平成十一年に七漁協が合併して出来た組合ですが、旧組合単位を越えた共同利用施設は当該ノリ陸上採苗施設が初めてであり、組合員相互の連携が深められ、より円滑にノリ生産活動が行われることを期待しています。

アカガイの生産技術と管理等の先進地視察研修に参加して

青年漁業士 佐藤 敏幸
（仙台市漁業協同組合）
青年漁業士 赤間 辰之
（関上漁業協同組合）

現在、仙台湾のアカガイは、漁獲量が過去五カ年平均の二十%以下まで激減しており、今後天然資源の回復を図るとともに人工種苗を放流して資源管理を行なう必要があります。

このため、アカガイの種苗生産、中間育成の先進地である香川県に平成十五年七月二十九日（火）〜三十一日（木）の行程で、先進地視察研修に行つて来ましたので、概要を報告します。

① 香川県におけるアカガイの試験研究の取り組みについて

（香川県水産試験場）
・香川県の貝類漁業の漁獲量は、昭和

五十五年に約三十五トンありましたが、その後急激に減少し、平成六年には二トンまで落ち込みました。平成十年には二十トンまで漁獲量が回復し、現在は約十五トン前後で推移しています。

アカガイの養殖試験のため、昭和四十四年から同試験場で試験的に生産されたものと昭和四十七年から実施された天然採苗によるものが用いられました。しかし、天然採苗は付着稚貝数の年変動が大きく、また年々付着数が減少したため昭和五十四年に終了したとのことです。現在、同試験場では人工的に一mmサイズの種苗を百万個生産しています。

種苗生産は六月中旬に始まり、九月に入り殻長が一mmサイズになると中間育成のため沖出します。殻長七〜八mmに達すると網替えを行ないます。ここまでの生残率は五十〜七十%です。殻長が二十五〜三十mmになる翌三〜六月（生残率三十〜五十%）には、本格的に養殖するため、一籠当り四百個を目処に収容します。再度網替えをする十一月月上旬頃には、殻長が六十mm、体重は五十gになつています。籠養殖に移行してからの生残率は九十〜百%です。さらに翌四月に九十gを目処に選別を行ないます（生残率は九十%）。七〜八月に百g以上に成長したものを出荷します。

アカガイ養殖の条件としては、次の点が重要となります。

海水温は二十五度以上の状態が長

期間継続しないこと。底質は全硫化物が一〜一・五mg/g程度以下であること。塩分濃度は二十七パーミル以上であること。溶存酸素量は二ml/l以上である事などです。

② 栗島漁業協同組合におけるアカガイの取り組みについて

（栗島漁業協同組合）

栗島漁協では、同漁協研究会が中心となつて昭和五十年代から水産試験場の技術指導を受けながら種苗生産に取組み、ある程度安定的に生産してきましたが、現在は諸事情により自前で生産は行わず、山口県から一mmサイズの種苗（二円/個）を購入し、中間育成した後、各地へ出荷しています。

昭和四十六年頃から養殖試験が開始され、試行錯誤の結果、昭和五十六年頃から本格的に養殖が行われるようになり、大型鉄筋籠の導入によって安定的に生産できるようになりました。年変動はあるものの平成元年の生産量は過去最高の約三十四トンに成りました。その後、生産量は減少したものの現在では貝類漁業の漁獲量と同量の約十五トン前後で推移しています。

・養殖アカガイの単価は東京築地市場への出荷で千五百〜千六百円/kg（九十〜百mmサイズ）で取引されているとのこと。

・現在、香川県ではアカガイが大量発生する年がなくなつたため、資源回復を目指して種苗を放流して

います。資源量が少ないことから
貝類漁業は衰退気味であるのこ
とです。

今回先進地視察研修で習得した成
果をこれから私達漁業者自らが三カ
年事業として本格的に取り組む仙
台湾ブランド赤貝緊急再生事業（総合
的な資源、環境調査、天然採苗試験、
中間育成、放流）へ即実践として応
用し、仙台湾のアカガイ資源の回復
を目指したいと思っています。

最後に、宮城県漁業士会南部支部
で、初めての試みとして私達を派遣
して頂き、充実した視察研修を行う
ことができました。快く送り出して
頂きました会員の皆様にこの場をお
借りして御礼申し上げます。



種苗の説明を受ける視察参加者

★国内視察研修報告★

宮城県漁業士視察参加者

平成十五年七月七日から九日にか
けて、積極的に新規漁業就業者の確
保・育成に取り組んでいる島根県隠
岐地区を訪れ、視察研修を実施しま
した。視察研修先は、島根県隠岐支
庁水産局、知夫村にイターンした加
藤二土さんが代表を務める岩牡蠣屋
西の島の山下養殖場と浦郷漁業協同
組合が運営する水産物直売所「すい
すい」です。

○島根県隠岐支庁水産局

隠岐支庁の水産業改良普及員の方
から隠岐地区の漁業と後継者対策に
ついて話を伺いました。



島根県隠岐支庁水産局において

①隠岐地区の漁業の概要

項目	内容
漁業生産量	5.5万トン（平成13年）
漁業生産額	99.5億（平成13年）
水揚げ港	境港
まき網漁業	19トン型（主力漁業）
釣り漁業	約900隻
かに籠漁	韓国との競合
採貝藻漁業	アワビ、サザエ
イワガキ養殖	出荷量15万個程度
その他養殖	ブリ、タイ、ワカメ等
漁業就業者	52%が60歳以上

隠岐諸島は島後（一島）と島前
（三島）からなる人口二万五千人の
漁業の町です。漁業協同組合数は四
つで、島ごとに漁協が一つあります。
水揚げのほとんどは、運搬船で境
港に運ばれています。ブリやタイ等
の高級魚の養殖は、えさ代の高騰、
関西地域の不景気等の影響を受け、
廃業が目立っているそうです。島の
特産物であるサザエは、十年前まで
キロ千円以上でしたが、今はその
半値以下となったそうです。

こうした状況の中、注目されてい
るのが、イワガキ養殖です。現在、
三経営体が、年間約十五万個を出荷
しています。出荷単価は、一グラム
一円と決めており、単純に殻付き重
量三百グラムの物は三百円です。値
決めにあたっては、セリを避け、で
きるだけ相対販売を心がけているそ
うです。種苗は島根県栽培漁業セン
ターで生産し、原盤一枚に十個付着
したものが百五十円で販売されてい

ます。漁場は十分あり将来的には五
十〜百万個の出荷が可能とのことで
した。ちなみにサイズ別の規格は、
Sサイズが二百〜二百五十グラム、
Mサイズが二百五十〜三百グラム、
Lサイズが三百グラム以上で、一番
出荷が多いのはLサイズです。

②新規就業者の確保について

島根県漁連、隠岐地区の漁協、隠
岐地区の町村がUIターン者の受け
入れに積極的です。浦郷町の場合、
町と漁協が協力して、平成七年から
リクルート誌、全国版の新聞等を活
用して漁師を募集しています。離島
ブームも手伝って、現在まで島外か
ら二十九人のまき網漁船乗組員を確
保したそうです。
漁業就業希望者の受け入れに係る
島根県漁連と島根県の支援は、次の
ようなものです。

新規漁業就業希望者への支援内容

機関	対応内容
島根県漁連	・新規就業相談の対応 ・漁業就業者フェアへの参加
島根県	・漁業体験学習や研修会開催等の 取組への助成 ・研修生へ生活支援金の交付 （1年目10万円／月支給） （2年目15万円／月支給） ・指導漁家に対する指導料の支給 （年間5万円）

手厚い支援内容となっていますが、島根県のふるさと定住財団と連携して事業を実施しているとのこと。知夫村ではさらにこの支援制度に独自の財源を加え、いわがき養殖で計四人の青年漁業者を確保しています。こうした関係機関の取組の甲斐もあって、家族を含めた隠岐地区へのイターン者は、百名余りになります。生活支援金の支給については、賛否両論あると思いますが、離島における定住促進や一次産業の後継者確保の難しさを改めて感じさせられました。

○イワガキ養殖について

①「岩牡蠣屋」

横浜からイターンで知夫村に定住し、イワガキ養殖を営んでいる加藤二土さん（岩牡蠣屋代表）を訪ねました。

岩牡蠣屋はイターン者（四経営体）と地元の漁業者を合わせた三十人で運営されています。養殖施設は、現在筏式のもの十台あり、筏一台の価格は百八十万円で、全漁連の補助事業や県・村の助成制度を利用して整備しています。

一本の垂下ロープには原盤五枚、個数にして五十個分のイワガキが吊り下げられています。ロープの設置間隔は、約五十センチです。垂下水深は、約三メートルです。一台の施設には、約五百本のロープが取り付けられ、二万二千五百個が収容されています。約三年養殖し、出荷サイズ（三百グラム）に達すると原盤から剥離してカゴに収容して出荷

に備えます。出荷先が決まると、機械で一個づつ付着物を丁寧に取り除き、その後浄化施設で二十四時間浄化します。



岩牡蠣屋の養殖施設

出荷時期は四、六月で宮城県とは時期的にずれます。七月になると卵を持つので出荷しないということでした。出荷形態はインターネット等を利用した小口販売（五、六個／一出荷先）です。東京・大阪の料理店が取引先です。

成長の遅いものは、耳吊りし、さらに一年養殖されます。ホタテ原盤からの剥離、出荷前の殻掃除、分散後の耳釣り作業等はほとんどが手作業であり、大変手間のかかる養殖という印象を受けました。

①養殖場所についてお聞きしたところ、がかかるため、規模拡大が難しい。

②離島のため運賃が高い上（五キロ入箱一つの船賃が千円）、小口販売なので運賃代がかさむ。このように、労働力の確保と輸送コストに課題があるようでした。一方、養殖イワガキの利点として「天然ものに比べ殻が薄く身入りが良い」ようで、料理店にとっては、大歓迎のようです。東京のオイスターバーでは、加藤さんたちが生産したイワガキが一個三千円で売られていることを聞き大変驚かされました。



岩牡蠣の実入りは抜群

②山下養殖場

次に訪れたのは、西の島の浦郷町でイワガキとメガイアワビの養殖に取り組んでいる山下養殖場です。養殖場の山下社長は、以前に浦郷漁協の組合長を務めていた方でした。メガイアワビは、養殖物でも出荷

価格がキロ六千円もするそうで、現在、試験的に養殖し、ノウハウを蓄積している最中とのことでした。



山下社長（左から二人目）と視察参加者

こちらでは、イワガキは延縄式の施設で養殖されていました。その他の養殖方法は、知夫村の「岩牡蠣屋」とあまり変わりありません。独特なのは、出荷サイズに達した物を潜水して選別・水揚げするという方法です。浦郷町には養殖に適した漁場がたくさんありますが、元々漁船漁業が主体なので、漁船の航行に支障がないよう延縄式を採用し、中層吊りにしているとのことでした。

出荷先は、大阪が不景気で需要が少ないため、東京が中心です。

山下社長が課題として語ったのは次のようなことです。「出荷してから

三日以内に消費してもらわなければならない。いくら丁寧に殻を掃除しても、すべての付着物を取り除けなかったのではない。出荷して三日経つと残った付着物が異臭を放つようになる。店側は当然いやがり、一回当たりの仕入れの量を少なくする「これが殻付き出荷の弱点ということでした。

○水産物直売所「すいすい」

「すいすい」は、浦郷漁協直営の水産物直売所です。ここでは、店長の屋敷さんから主に直売所の課題について伺いました。

項目	内容
鮮 魚	アジ、メバル、イワガキ等 (地元の漁師が水揚げ)
加 工 品	アジの干物、イワシの粉末、 トビウオの粉末、板ワカメ等 (漁協の施設で加工)
顧 客	地元住民8割、観光客2割
最需要期	7～8月、12月(贈答品)
サービス	高齢者宅への鮮魚の宅配 車による移動販売

課題の一つが品揃えです。「すいすい」では、地元鮮魚の他に浦郷漁協の加工施設で製造した加工品や冷凍品を仕入れています。しかし、目玉商品である鮮魚の量・種類が漁模様や時期によって限られるため、お客さんの要望に沿えないことがあるようです。島でとれた魚を消費者に届

けたいという店側の思いと消費者が求めるものとの間には未だ若干の距離があるようでした。



水産物直売所「すいすい」

もう一つがスーパーとの差別化です。売り上げの八割が地元の人の購入ということもあって、地元の人に便利なサービスを行っていました。それは、簡易な保冷車による移動販売と宅配サービスです。高齢者が多いという背景を上手に生かした取組です。保冷車は中古の軽トラックを改造したもので、経費をかけない工夫もしてありました。

「昔は黙っていてもお客さんは来てくれましたが、今は努力しても来てくれません。とにかく経費をかけずに、お客さんが望むサービスを次々と考えていくことが重要です」と屋敷店長さん。アイデアとサービスの大切さをしみじみと感じました。

視察研修を振り返って

霧の中から島後(どうご)の聳え立つ山々が姿を現した途端、搭乗した二十五人乗りの小型プロペラ機は隠岐空港を目前にしていました。出発前、伊丹空港の待合室で隠岐上空が視界不良のために、飛行機が引き返す可能性があるかとアナウンスされていたのです。しかし、飛び込んだ島風景は私たちの一抹の不安をすぐ取り除くには十分すぎるほど風光明媚で、神々しいものでした。空港からタクシーで研修先の隠岐支庁水産局まで移動する間、海上や漁港施設にはプレジャーボートも養殖施設も、そしてカモメが飛んでいる姿も目にすることはありませんでした。私たちの地元の海とは、別の光景が広がっていました。

一番印象に残っているのは、知夫村でイワガキ養殖に取組んでいる加藤二土さんを訪問した時のことです。加藤さんは、二十八歳で心機一転、知夫村の定住募集に応募し、神奈川県から家族とともに移住した養殖漁業者です。仲間とともにイワガキを隠岐の特産品にするためがんばっており、加藤さんのお話は漁業経営に対する強い意志とチャレンジング精神に溢れており、我々に忘れていた何かを思い出させてくれたような気がします。

各島を回った際、どの島も観光地でありながらお土産さんが少なく、また、漁師町独特の活気やあたたかさがありまじやうに感じられました。

した。長引く不況もあって、本土からの観光客の減少が島の活力に少なからぬ影響を及ぼしているようでした。今回、離島における漁業振興と定住促進という難しい課題に取組んでいる多くの方々とお会いでき、大変参考になりました。この研修で得たことを地域の漁業振興と後継者の育成・確保に反映させていきたいと思っています。



三郎岩(島前地域)

漁業士会からのお知らせ

海人では、皆様からの原稿を募集しています。内容は自由で四〇〇字詰め原稿用紙一枚から二枚にまとめ、漁業士会事務局まで送付してください。寄稿をお待ちしております。

トビツクス

第九回 全国青年・女性漁業者交流大会について

第九回全国青年・女性漁業者交流大会が平成十六年三月三日から四日にかけて、東京の虎ノ門パストラルで開催されます。全国から五十を超える団体が参加し、漁業技術部門、増・養殖部門、漁業経営部門、環境保全活動部門、地域活動部門の五部門に分かれて、日ごろの活動の成果を発表します。本県からは、雄勝町雄勝湾漁協青壮年部（発表者 伊藤康彦さん）と表浜漁業協同組合女性部（発表者 阿部真喜子さん）の二団体が参加します。

二〇〇四年農山漁村パートナーシップ推進宮城県大会について

平成十六年一月二十八日に仙台市民会館で、「二〇〇四年農山漁村パートナーシップ推進宮城県大会」が開催されました（主催 宮城県）。本大会は、農山漁村の女性の連携を強化し、女性を取り巻く諸問題を解決しながら男女共同参画を推進するため年に一回開催されており、今回で十五回目を迎えました。漁業士会からは、鈴木会長が来賓として出席しました。また、指導漁

業士の江刺みゆきさんが所属する石巻地区漁業協同組合女性部の皆さんとともに、大会のオープニングで創作太鼓（銭太鼓）を披露し、約九百人の参加者から拍手喝采を浴びました。



石巻地区漁協女性部による創作太鼓

海の子作文から

宮城県漁協女性部連絡協議会主催の「第二十回みやぎの海の子作文コンクール」で、小学校高学年の部で見事「宮城県知事賞」に輝いた志津川町立戸倉小学校六年佐々木大堯君の作品を紹介します。

「海にかける僕の夢」

志津川町立戸倉小学校六年

佐々木 大堯

ぼくには、かなえない夢があります。それは父の仕事を継ぐこと。そして大きなホヤや力キを育てることです。ぼくの家では養殖業を営んでいます。ぼくがまだぐっすり寝ているまっ暗いうちに、父と母は海の仕事に行きます。今はホヤあげの仕事で忙しく働いています。ぼくもこの夏休み中何度か朝早く起きて、両親と海の仕事をしてきました。

父と祖父は暗いうちに船を出し、ホヤあげの場所に行きます。一日がでていました。気持ちのよい朝日をあびながら、父と祖父が二十個くらいのかたまりになっているホヤを一個ずつもいでかごに入れます。ぼくは手伝う気で行ったのですが、すぐに酔いをして具合が悪くなつてしまいました。そんなぼくのように、父や祖父は当たり前のように、どんな仕事を進めていきます。

ホヤをかごいっぱいに入れて港に戻ると、工場では母が待っています。さっそく陸にホヤをあげ、工場に運びます。工場では母を始め、女の人たちが待つていて、運ばれたホヤは一個ずついいねいにむかれていきます。父が一生懸命にとってきたホヤを今度は母が引き継ぐのです。家族の協力がなにより大事な仕事なんだとぼくは強く感じました。

ぼくは、よくむきたてのホヤを食べます。四個も五个も食べても、あきないくらいむきたてのホヤはおいしいです。そんなおいしいホヤをいろいろな人に食べてもらうために、むいたホヤはきれいに洗い、袋詰め

にしてお店に出します。父や祖父が朝早くからむいたホヤを、今度は母がむく。そんな家族のリレーでおいしいホヤが出荷されるのです。きつと買ってくれたお客さんは、おいしいと言いつつ食べてくれるんだろいうな、そう思うとぼくまでうれしくなつてしまいます。

ぼくのうちではホヤの他にも力キの養殖もしています。もう少しすると力キの時期に入ります。父はよく「今年も力キが大きく育つてるといいなあ」と言います。父の頭の中はいつも海の仕事のことでいっぱいなのです。力キの時期は冬の寒い時期なので、朝の寒さが身にしみる中で両親や祖父は働いています。ぼくも休みの日には力キの手伝いもしたいと思っています。どんな季節でも働いている両親や祖父の姿を、ぼくは小さいころから見ました。家族で協力して頑張っている姿はぼくの誇りです。

ぼくの家族はその季節ごとに、お客さんのおいしいと言ってくれる顔を想像しながら、一生懸命に海の仕事をしています。ぼくも大人になったら、父より大きなホヤや力キを育てられるような立派な後継者になりたいと思います。

海人編集委員

編集委員長	阿部 悟
北部委員	阿部 長喜
中部委員	佐々木 克弥
南部委員	内海 信吉